

一步先への刑法入門

照沼亮介 = 足立友子 = 小島秀夫

担当編集から 難解な専門用語や抽象的な議論が多く、苦戦する学生の方も少なくない刑法。そんな刑法学の世界に少しでも親しみを感じてほしい、そして自分の頭で考えることの面白さを知ってほしいという思いから生まれた新しい入門書のご紹介です。

本書には、長く続く階段を一段ずつのぼっていくように確実に知識を身に付けられる工夫をちりばめました。Unit冒頭の“Topics”では、具体的な例として、誰にでも起こりうる事件や最近報道で目にするような事件を取り上げています。これから学ぶ刑法学上の論点はどんな事例と関係しているのか、具体的なイメージをもって読み進めていただけたらと思います。また各所に設けた“問い”や“Check Points”を活用し、自分の頭で考えることを意識しながら学んでみてください。この本を読み終えたあと、きっと一步先へと進んでいるはずですよ。

この本が中級・上級のテキストへと進んでいくための第一歩になれば幸いです。(1)



レベル - 用途 - 対象 -
 初級 学習 学部

2023年12月発売 / 364頁 / 定価3520円(税込)
 A5判 / 並製



Point Topics・問い・解説・Check Points(まとめ)で構成しています。

Unit 16
罪数と量刑

■ Topics ■ 口は災いの元?

ここでは、裁判官経験者の著書から以下のような事例を紹介しよう。まず、「普通の主婦」であるX女が、学校帰りの小学校低学年の少女Aを不注意により車ではねって死にさせた。その後、XがAの葬式に参列した際に「Aが飛び出した」と発言したため、Aの母親Bが「娘がそんなことをするはずがない」と激怒し、それ以降、一切Xとの交際にも応じず、ひたすらXが刑務所に入ることを望み、ついにその望み通りにXが実刑となり、確定した。しかし、この種の事例の通常の処理に比べおそろしくXは執行猶予を許されていたと考えられ、Aが飛び出したかどうかは明らかにはならなかったものの、あり得ないと言断できる合理的な根拠もなかったため、結局、Xは不重要な発言が発端となって実刑に処されたというほかない。という(原田國男『量刑判断の実際(第3版)』立花書房、2008年)143頁)。このような問題についてどのように考えるべきなのか、本Unitを手がかりに考えてみてください。

1 罪数・量刑判断のプロセス

犯罪の成立が認められた場合、言い渡される刑の重さほどのようにして決められるのか。同一の公判手続において複数の犯罪が成立した場合はどのように処理されるのか。

▶▶法定刑・処断刑・宣告刑

犯罪の成立が認められた場合、裁判所は被告人に対して法律上認められた範囲で言い渡すべき刑を確定する作業を行う。これを広義における量刑(刑の量

Unit 16 罪数と量刑

定)と呼ぶが、ここではまず個々の刑罰法規に定められた刑(法定刑)について加重・減軽を行って処断刑を形成し、その範囲内において最終的な宣告刑を決定するという手順が踏まれることになる。

▶▶処断刑形成の過程——罪と数罪

法定刑から処断刑を形成する際には、例えば再犯加重(56条1項・57条)のような加重事由や、自首(42条)・未遂(43条)などの任意的減軽事由、心神耗弱(39条2項)・帮助犯(63条)などの必要的減軽事由、その他裁判官の裁量に委ねられている酌量減軽(66条)が考慮され、その結果として例えば「半月以上5年以下」のような形で処断刑が得られることになる。

もっとも、当該事実について1つの刑罰法規(罰条)のみが適用される場合であればその法定刑から処断刑を形成していけばいいが、事実の評価に際して複数の刑罰法規を適用することが不可欠である場合には、各々の規定の法定刑を前提としてどのように処断刑が形成されるべきなのかを判断しなければならない。その際、まずは1つの刑罰法規を1回適用すれば足りるのか、それとも複数の刑罰法規の適用(ないし同一の刑罰法規の複数回の適用)が必要なのかという問題(狭義の「罪数」の問題)があり、後で、複数の刑罰法規の適用が必要とされた場合にはいかにして処断刑を形成すればよいかという問題(「犯罪の競合」の問題)が生じるのである(以上につき、2・3で検討)。

▶▶量刑判断

以上を経て、最後に処断刑の範囲内で諸般の事情を考慮し宣告刑が形成されるが、この過程が狭義における「量刑」判断に相当する(以上につき、4で検討)。ここでは、いかなる事情をどのような形で考慮すべきかが問題となる。

☑ Check Points

☐ 被告人に言い渡す刑を確定する上では、①法定刑から処断刑を形成し、その上で②処断刑から宣告刑を形成する必要がある。

☐ ①の場面では一罪か数罪かの区別が問題となり、②の場面ではどのような事情をどのように考慮すべきかという点が問題となる。

詳細は、小社ウェブサイトの本書のページをご覧ください。

